

昭和五十二年国文学会活動状況

△教育問題懇談会・国語教育研究会▽（八月一日・勤労会館）

特設国語の問題点 四條 文子（光華高校）

定時制高校の現状と国語教育

——兵庫県立武庫高校の場合——

寺川真知夫（武庫高校）

△総会・研究発表会▽（十一月二十三日・勤労会館）

・実践報告

短歌教材の可能性——中学二年生——

広田 収（同志社香里高校）

・研究発表

平家物語について 谷口 広之（大学院）

大正期の労働文学——前田河広一郎について——

水上 勲（尼崎西高校）

昭和五十一年度卒業論文題目

△日本文学古代前期▽

播磨風土記 摺墓伝説考

浦島伝説における伝承の力について

『檀山節考』と棄老伝説

「歌物語」の成立過程をめぐって

——和歌史的考察から——

大伯皇女小論

万葉集の代作歌

万葉集の自然詠

——卷十の分析から——

山上憶良論

高橋虫麻呂

大伴旅人——讀酒歌を中心に——

大伴家持小論

大伴家持論

家持の春愁について

中西 純子

工藤 美智子

荒木 尚世

山海 正恵

立岡 三幸

後藤 朱実

西村 康子

浜野 安則

井上 多喜子

太田 てる子

喜田 真理子

松村 京子

小山田 麗子

△日本文学古代後期▽

伊勢物語原初形態へ向けての基礎的考察 西田 陽子

道綱母 —— その愛を追って —— 今 西 和 代

『蜻蛉日記』

—— 物詣からの一視点 —— 河 端 み な み

『蜻蛉日記』

—— 道綱母の心理的内面 —— 西 川 真 由 美

清少納言論

紫式部論

—— 「女」としてのその素顔 —— 江 上 恵 子

源氏・明石物語の創造性

—— 靈験譚とかかわって —— 平 田 郁 子

源氏物語の和歌と自然

—— 花・紅葉をめぐる —— 平 山 真 理 子

源氏物語の方法と夢

—— 源氏物語論 —— 川 本 真 貴

源氏物語論

—— 奥田浩久 —— 奥 田 浩 久

梁塵秘抄

新古今前後における定家的世界について

愚管抄における文芸的側面の考察

町衆文学の方法と展開

赤 松 充 子

宮 脇 由 紀 江

玉 川 八 重 子

守 本 進

能の人間たち『平家物語』をふまえて

観阿弥研究

『義経記』と謡曲

謡曲「井筒」の心理劇的構造

観世小次郎信光についての考察

狂言における『鬼』の一考察

『閑吟集』における小歌について

菅 原 菊 子

若 狭 夏 子

佐 古 成 美

永 原 裕 子

下 出 祐 太 郎

大 塚 雅 子

坂 本 多 賀 子

△日本文学近世▽

『好色一代男』

—— その編集と改稿 ——

『好色五人女』

『好色五人女』

『好色一代女』考

好色一代女考

『本朝二十不孝』

世間胸算用考

『野ざらし紀行』

—— 『芭蕉の生き方』 ——

『出世景清』論

大 久 保 香

阿 座 上 律

太 田 陽 子

丹 田 順 子

山 田 玲 子

宮 川 路 子

大 政 操

稲 葉 佳 子

——その近世的諸相と

儀式性をめぐって 和田 融

近松の心中物の悲劇構成と手法 西谷 茂樹

「曾根崎心中」について 黒津 日出子

「用明天王職人鑑」論 福岡 恵子

——近世化をめぐる一考察——

△日本文学近代・現代▽

鏡花における故郷の問題 岩井 祐子

高山樗牛論 渡辺 孝夫

「夢十夜」における

ラフカディオ・ハーンの影響 藤原 恵

『行人』考 鈴木 二美子

漱石『こころ』の死のイメージ 高倉 佐代子

『こころ』論 平嶋 三津子

近代詩における〈像〉の自立

——『月に吠える』の 成立史の問題—— 大北 正明

谷崎潤一郎研究——女と老人—— 加藤 節子

芥川竜之介論 浜口 順子

芥川竜之介

——芥川が『歴史物』に求めたもの 武藤 智恵子

宮沢賢治論——その信仰と文学—— 桑原 敏子

宮沢賢治の童話 高桑 朋子

宮沢賢治論——淋しさの研究—— 青木 英樹

宮沢賢治のファンタジー 藤野 晴美

——「銀河鉄道の夜」を中心に——

宮本百合子論 中島 いづみ

——現実認識と創作方法—— 今崎 彰子

梶井基次郎研究 渡辺 美紀

堀辰雄論

丸山薫論 岡田 善充

——その詩的世界の構造を探って—— 森 真理子

太宰治「斜陽」論 浪江 利美代

『人間失格』論 伊藤 治喜

太宰治論

太宰治

——弱さを武器とすることの 文学的意味をめぐって—— 大熊 剛彦

太宰治の倫理意識 高橋 裕普

武田泰淳論

——その人間把握を中心に——

安部公房 ——日常性との闘争——

辻邦生論

高橋和巳論

高橋和巳試論

大江健三郎の世界

五木寛之論

山川方夫研究

市川 まり

若井 由美子

三橋 典子

瀬戸 修

妹尾 雄太郎

元 宏

小畑 紀公子

北村 佳代子

俳風「柳多留」における

特徴的な表記法の研究

明治中期における人称代名詞

「金蘭寺」における三島由紀夫の文体

京ことばの美しさ

——主に計量的観点より——

京ことばの美しさについて

京わらべうたの特徴

十津川地方における

「助動詞・助詞・人代名詞」について

津軽地方における方言調査研究

——三つの語彙について——

山内 美鈴

津村 節子

山下 法子

大石 真子

高松 秀継

八木 恵子

桜本 泰司

石動 幸夫

△国語学▽

「聖」という語の受け入れ

言語表現とわが西遊記

言語意味論

——言語過程説に於ける

意味に関する一考究——

近世日本の外来語

芭蕉発句の用語の変遷

——「軽み」と

坂田 忠敬

大獄 和好

山口 成夫

植松 洋子

表現の関係を追って——村中昌恵

昭和五十一年度修士論文題目

作者名記載の有無より万葉集の編纂意識を考える

藤原為時伝攷

平家物語 ——語り物としての検討——

晩年の世阿弥試論

岡 嶌 秀 仁

久保田 孝 夫

生 形 貴 重

岩 本 京 子

## 予告

土橋 寛教授（明治四十二年二十七日生）は明年にはめでたく古稀の年をお迎えになります。この慶事の祝賀記念のために教授知友の諸先生、関係者の御寄稿をお願いし

土橋 寛教授古稀記念論文集

を編むことになりました。

同書は、笠間書院社長池田猛氏の一方ならぬ御厚意により刊行される予定でございます。

ここにこの旨を予告し、関係者各位の尽大なる御協力をお願いする次第です。

昭和五十三年三月一日

同志社大学国文学研究室気付

土橋 寛教授古稀記念論文集刊行会

責任者 南波 浩

## 会費改定にあたって

昭和五二年度定期総会（52・11・23）において、本学会会費を、昭和五三年度から、二、〇〇〇円に改定することが可決されました。物価高騰のおり、大幅増額の好ましくないことは当然ですが、雑誌発行・会報発行などの、学会としての基本的な活動を維持するために、やむをえない措置でした。

会員のみなさんに、この事情のご理解をいただくとともに、同窓知友の方に、復会・入会をお勧めくださるなど、ひきつづき本学会のために積極的なお力そえをお願いする次第です。（学会会計）

## 編集後記

本号は河野講師のを除いて、すべて卒業生の論文である。最近の本誌の紙面には、卒業生の活発な研究活動が反映している。ようやく本学会の地歩が固まってきたといえるのだろうか。このうちは、本誌が広く国文学界でも注目される存在になることである。研鑽に努めねばならないと思う。

学界の活動は機関誌の発行と切り離しては考えられないだろう。そのためにも、年二回の機関誌の発行を実現したいものだ。

（玉井）